

2021 年度日臨技病理・細胞診検査に関するアンケート調査の報告 2

◎松原 真奈美¹⁾、遠藤 浩之²⁾、棚田 諭³⁾、松本 慎二⁴⁾、山城 篤⁵⁾、加戸 伸明⁶⁾、二瓶 憲俊⁷⁾
島根県立中央病院¹⁾、済生会新潟病院²⁾、地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪国際がんセンター³⁾、福岡大学病院⁴⁾、那覇市立病院⁵⁾、東海大学医学部付属病院⁶⁾、一般財団法人 竹田健康財団 竹田総合病院⁷⁾

【はじめに】一般社団法人日本臨床衛生検査技師会精度管理実施時に、「細胞診検査（セルブロック検体を含む）に関する検体の管理」についてアンケート調査した。【方法】全施設対象に日臨技精度管理共通アンケートとして、細胞診検査に関する設問（13 項目）に対し回答いただいた。細胞診検査に関する設問は細胞診精度管理受検状況をもとに集計した。【結果】検体到着後直ちに処理を行っていた施設は 467 施設（50%）、ほぼ 1 時間以内に処理を行っている施設は 185 施設（20%）で、併せて 70%を占めていた。細胞診検体の標本作製法について、直接塗抹法が 864 施設（33%）、セルブロック法 632 施設（24%）、集細胞法 615 施設（23%）で、液状化検体細胞診についても 503 施設（19%）で実施されていた。細胞診精度管理未受検施設でもセルブロック法を実施している施設が 20 施設あった。セルブロック作製法の固定液については、10%中性緩衝ホルマリン液を使用している施設が 604 施設（86%）で多く、6～24 時間の固定時間で取扱っている施設が 475 施設（70%）であった。セルブロック検体のアナリシス項目と

して、免疫染色（コンパニオン診断以外）が最も多く 522 施設（19%）、次いで EGFR 遺伝子変異検査などの肺癌遺伝子検査を実施した施設が多くみられた。【考察】免疫染色やがんゲノム検査を想定し、積極的にセルブロックを作製している施設が増えていることが伺えた。今後は、セルブロック検体が病理学的診断に留まらず、がんゲノム診療にも重要な役割を担っていくことを理解し、検体処理することが重要と思われる。【結語】今回のアンケート調査で、細胞検体に関する管理状況の現状把握がなされた。がんゲノム診療における細胞検体の取扱いが示され、細胞検体に関してもプレアナリシス管理の重要性について理解する必要がある。がんゲノム診療の時代となり、病理組織検体だけでなく細胞検体も推奨される検体管理を行い、施設間差のない標本作製が実施されることが求められてきている。

連絡先 島根県立中央病院 0853-22-5111